

<株式会社エフエム東京 第 506 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 6 年 3 月 5 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 11 階大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（5 名）

ロバート キャンベル 委員長

佐々木 俊尚 委員

山口 真由 委員

松田 紀子 委員

柴崎 友香 委員

◇欠席委員（1 名）

秋元 康 委員

◇社側出席者（6 名）

唐島 夏生 代表取締役会長

黒坂 修 代表取締役社長

内藤 博志 取締役編成制作局長

宮野 潤一 編成制作局次長 兼 編成部長

若杉 健太 編成制作局制作部長

延江 浩 編成制作局ゼネラルプロデューサー

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（55 分／ダイジェスト 35 分）
TOKYO FM 小澤征爾追悼番組『セイジ、フォーエバー』
2024 年 2 月 26 日（月）20：00～20：55 放送

＜議事内容＞

議題 1:最近の活動について

■2024 年 2 月度 聴取率調査結果

ビデオリサーチ 2024 年 2 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果を報告します（調査期間：2024 年 1 月 29 日～2 月 4 日）。今回も 6:00～24:00 の週平均におきまして、TOKYO FM はコアターゲット【男女 18～49 歳】区分、また【男女 12～59 歳】、【男女 12～69 歳】の主要 3 区分において、在京首位を獲得することができました。

- ◎【男女 18～49 歳】首位 (※単独首位)
- ◎【男女 12～59 歳】首位 (※ニッポン放送、J-WAVE と同率首位)
- ◎【男女 12～69 歳】首位 (※ニッポン放送と同率首位)

今回の結果は同率も含みますが、当社コアターゲット【男女 18～49 歳】、【男女 12～59 歳】区分は 22 年 2 月以来 13 期連続首位、さらに個人全体区分の【男女 12～69 歳】では 22 年 4 月以来 12 期連続首位と、連続記録を更新することができました。

各年代区分では上記のほか、【M1F1 (男女 20-34 歳)】【M2F2 (男女 35-49 歳)】、【男女 20 代】、【男女 30 代】、【男女 40 代】、【男女 50 代】と幅広い年代でも首位を獲得できました。

2023 年度の最後となった今回の調査をもって、22 年度から 2 年間、個人全体【男女 12～69 歳】区分を含む主要ターゲットの在京首位を継続することができました。次年度もトップ継続はもちろん、更なるスコア向上を目指して、話題性のあるコンテンツや PR に磨きをかけてまいります。

■TOKYO FM 自主興行 鈴木おさむ原作・脚本・演出 舞台『芸人交換日記』

2 月 20 日（火）～25 日（日）、TOKYO FM ホールにて当社自主興行による舞台『芸人交換日記』を開催しました。

今年 3 月に放送作家業と脚本業から退くことを発表している鈴木おさむ原作・脚本・演出による作品で、当社番組『SCHOOL OF LOCK!』の小森隼（GENERATIONS）と『JUMP UP MELODIES』の陣（THE RAMPAGE）をメインキャストに迎えて上演しました。

物語は、長年売れない芸人コンビが「交換日記」を通して互いの本音をぶつけ、夢と現実の狭間でもがきながらも絆を確かめ合う青春劇。当社で 20 年に渡りパーソナリティをつとめてきた鈴木おさむによるこの作品には、劇中にも『Skyrocket

Company』のマンボウやしろ・浜崎美保や、『山崎怜奈の誰かに話したかったこと。』の山崎怜奈が一部声の出演をつとめるなど、当社ならではの演出が加わり、全 10 公演で会場チケット約 2,700 枚を完売し、最終日はオンライン配信も実施しました。

初日取材にはテレビ、新聞、ウェブ等、多くのメディアが来場。取材に対し、鈴木おさむは「辞める前に、もう一度どうしてもやっておきたかった」「10 数年前、40 歳ぐらいの時に書いた物語を今見て、辞めていくっていうのは、こんな幸せなことはない。たくさんの人に、この物語を目に焼き付けていただきたい」と語りました。



◀劇中写真



◀フォトセッションの様子

議題 2 : 番組試聴

【番組名】

TOKYO FM 小澤征爾追悼番組『セイジ、フォーエバー』

2024 年 2 月 26 日 (月) 20 : 00 ~ 20 : 55 放送

【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、2月26日(月)に放送した小澤征爾追悼番組『セイジ、フォーエバー』です。2024年2月6日に逝去した、世界的に活躍した指揮者小澤征爾とゆかりの深い方々から話を聴き、小澤征爾の音楽を辿りました。

小澤征爾の証言者として番組に出演したのは、過去にTOKYO FMが多数のクラシック番組を制作していた時代、制作現場で小澤征爾と交流を重ねた担当ディレクターで、現在はクラシック音楽の評論家として活動する東条碩夫、小澤征爾の療養の際には代役に抜擢され、その背中を追いかけるように世界に羽ばたいたバーミンガム市交響楽団首席指揮者山田和樹、小澤征爾の長女で「小澤征爾音楽塾」でアシスタントディレクターをつとめる小澤征良、「小澤征爾音楽塾」の副塾長をつとめるチェロ奏者原田禎夫、小澤征爾から教えを受けた音楽家宮本文昭らです。

彼らの証言や、エピソードとともに小澤征爾の“残したもの”を辿る追悼特番としました。

【委員の意見および社側説明】

〔○〕委員意見／〔■〕社側意見

○素晴らしい番組で聴き入った。私はあまりクラシックに素養がないので、この内容がどのくらいのものなのか、ということは判断できないが、TOKYO FM が打ち出している「文化圏をつくる」というのが正にこういう番組かなと思った。昔はクラシック音楽というと何となく年配になって教養を身に着けるために聴くもので、それに対して若い頃はロックみたいなイメージがあった。クラシックというのは、ある種、教養としての音楽という側面があったと思うが、今となっては何が教養で何が流行なのかという境界線は揺らいでいる。例えば、クラシックを聴く、といっても、それは教養がある人という風には捉えられずに、どちらかというクラシックオタクというような、良くも悪くも「オタク」という言葉でいろいろな趣味の分野が定義づけられる方向にここ 10 年～20 年くらいで世の中の文化の有様が変わってきている気がする。そうすると年齢によって、50～60 代だから小澤征爾を聴くだろう、という発想ではなくて、あらゆる年代でクラシック音楽を好きな人は一定数いる訳なので、その人たちに向けてきちんとターゲティングしていくという、従来の年齢構成とはまったく違う形で刺さる番組を作っていくという発想が大事だと思う。このように垂直的に深く切り込んで、そこに新しいプラットフォームを作る発想はあらゆるジャンルに応用できる考え方だと思う。

○この番組はテレビでは成立しない気がする。ラジオだからこそできる、というのはとても大きいことだと思う。一般大衆に広く知られていなくても、その分野が大好きな人にはとても愛おしくかけがえのないものとして聴かれていく。そういう番組をいろんなジャンルでたくさん作っていくことはとても良いと思った。

○素晴らしい番組だった。クラシックについて詳しいわけではなかったが、才能溢れる若手指揮者山田和樹氏の言葉に驚いた。小澤征爾氏に贈る言葉が淡々と一言、「素晴らしい音楽をありがとうございました」と。誰にでも言えるような言葉ではあるが、そのあとに音楽が流れた。それを聴いて、音楽家の言葉はとても面白いと思った。また、ラジオというのは、言葉と同時に音楽が流せることがとても強みだと感じた。

○小澤征爾という超人的な才能の持ち主の追悼番組なので、周りにいる方々の証言はどれも言葉に力がある。1 人 1 人、それぞれ言葉を持っている方がとても丁寧に答えていて、聴いていて身に染みる思いだった。小澤氏の残した音楽の素晴らしさはさることながら、それらの方々の証言というか、影響されたこと、小澤氏の音楽に対する揺るぎない姿勢。大変貴重な番組だと思う。

○番組の中で小澤氏が実際にオーケストラを指導しているシーンがあり、「もう少

し早く入って」と言っている部分、私には全く違いが分からないのだが、そのやり取り自体が現場で行われている、とうことを知ることができて、大変興味深く聴いた。

○面白くて聴き入ってしまった。私も他の委員と同じく、クラシックの知識が全くないが、その中でも特に、指揮者って何をしている人なんだろうと思っていた。そして、小澤征爾氏の訃報の際、彼が残したものというニュースを拝見する中で、「指揮者のすごさとは何の違いなの？」と音楽好きな友達に質問をしてみたりもした。その専門的な部分は理解できていなくても、この番組を聴いて曲を作っていくときに（指揮者は）こういうことをしているんだ、というのが分かってとても興味深かった。ここの音にどういう思いがこめられている、とか、とにかく音の繊細な部分を聴こうと思って聴いた。それができるのが、ラジオならではだと思った。

○インタビューされていた人たちも、いろいろな関わり方をしていて、関係性の違う人がそれぞれの言葉でしっかりと気持ちを込めた言葉で語っていた。その言葉によって、「小澤さんはこういう人だったんだな」ということが分かり、またいろいろな方たちに深い想いを残す方だったんだなというものがとても伝わってきた。山田和樹氏の解釈、翻訳の必要性については、本当にハッとさせられた。番組で紹介されている音楽や、いろいろな言葉がまた違って聴こえてきた、権威と呼ばれるような立場になった人は、本人はそういう意図はなくても、弟子だったり、その方から学ぶ立場にある人は、どうしても言われたことはそのままにしない、という構図になると思うが、山田氏は自分なりに受け取っていて、解釈や翻訳が必要で、自分はこう考えていますとハッキリ言っていたところが、のちに続く人、後進たちに余地というか余白、自由さを残している小澤氏の素晴らしい部分だったと感じることができた。

○曲も様々なものが紹介されていて、55分が短いと思ってしまうくらいに、もっと長く聴きたいなと思った番組だった。小澤氏の訃報をきっかけに、彼の残した音楽を聴いた方も少なからずいると思うのですが、そういう人たちにもクラシックの入口としてとても良い番組になっていると思った。

○東条碩夫さん(音楽評論家)を最初に登場させて、70年代から80年代のTOKYO FMに眠っているテープから記憶を掘り起こしてとても魅力的に構成している。TOKYO FMのアーカイブ音源を使いながら、すごくドラマを仕込んでいると感じた。また、この番組を、訃報からこの短期間に制作していることも驚きだった。

■制作スケジュールはかなりタイトではあり、スタッフたちも入社前の音源ばかり。著作権者たちもすでに亡くなっていたりで、難しい部分もあり、局のOBでもある東条氏にいろいろアドバイスを頂きながら、番組完成まで導いてもらった。

関係者の中には小澤氏の訃報に触れ、携帯をオフにして直前まで連絡が取れない方もいた。倉庫から過去の音源をみんなで探し、作った番組だった。

■著作権に関しては少し法律も変わり、以前よりは許諾が楽になった部分もあるが、まだまだ課題もある。また、過去の音源は、そもそも当時にアーカイブするという概念がなかったため、残っていなかったり。その中で小澤氏の番組は奇跡的にアーカイブが豊富にあったということがある。来年開局 55 周年を迎えるにあたり、また特別番組を企画するのもいいと思っている。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「ドライバーズインフォ」

3月30日(土) 5:55~6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>